

心の扉を 開いたら

患者会・福祉団体便り

相模原の障がい者施設殺傷事件で亡くなられた19人の方のご冥福と、けがをされた皆さまの回復を祈り、関係者の早急な「心のケア」を関係機関に望みます。計画的で凶悪残忍な今回の事件は、施設の前職員による犯行で、障がいのある人や私たち親にとり驚きと怒りと悲しみが大きく、事件を口にすることさえ拒む人もいます。「障がい者はいなくなればいい」との、容疑者の異常な供述に関する報道は、絶対に障がい者本人たちに聞かせたくありません。連日の事件報道を見て「私たちがいない方がいいの?」と問い掛けてきた知的障がいのある人がいます。本人は事件の詳細をよく理解できていないためにその顔は笑顔でしたが、少し不安げな態度に事件への恐怖心を垣間見ることができました。事件は、外部侵入者への安全対策や職員の資質など、障がい者施設への日常的な不安要素のある多くの問題を提起しました。しかし事件から約1カ月たった今、容疑者が措置入院の対象者であったかの詳しい検証が必要であるにもかかわらず、今回の事件を受け

殺されて良い命はない

て「措置入院の在り方」を見直すのは、少し論点がずれているような気もしてなりません。「民主主義と人権」は切り離せないにもかかわらず、1996年まで存在した「優生保護法」の目的には、「優生上の見地から、不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護する」と明記されていました。96年の同法改正により、優生学的思想に基づいて規定されていた強制断種等に係る条文は削除されましたが、この「優生思想」には、いまだにさまざまな意見があります。

現在行われている出生前診断で、「異常」との結果が出たことで出産を取りやめた人は90%を超えます。その現実から見れば、「障がい者はいなくなればいい」という容疑者の異常な供述に近いと思われる意識や思想が国民の価値観の中に深く根付いているということ、残念ながら否定できないかもしれません。

障がいのある無を問わず、誰もがお互いの人権を尊重した共生社会の実現を目的とした制度や法が施行されています。しかし、一人一人の意識や思想が変わらない限り、全ては「絵に描いた餅」であり続けます。「殺されて良い命、死んで良かったというような命はない」。このことへの理解を心から念願します。